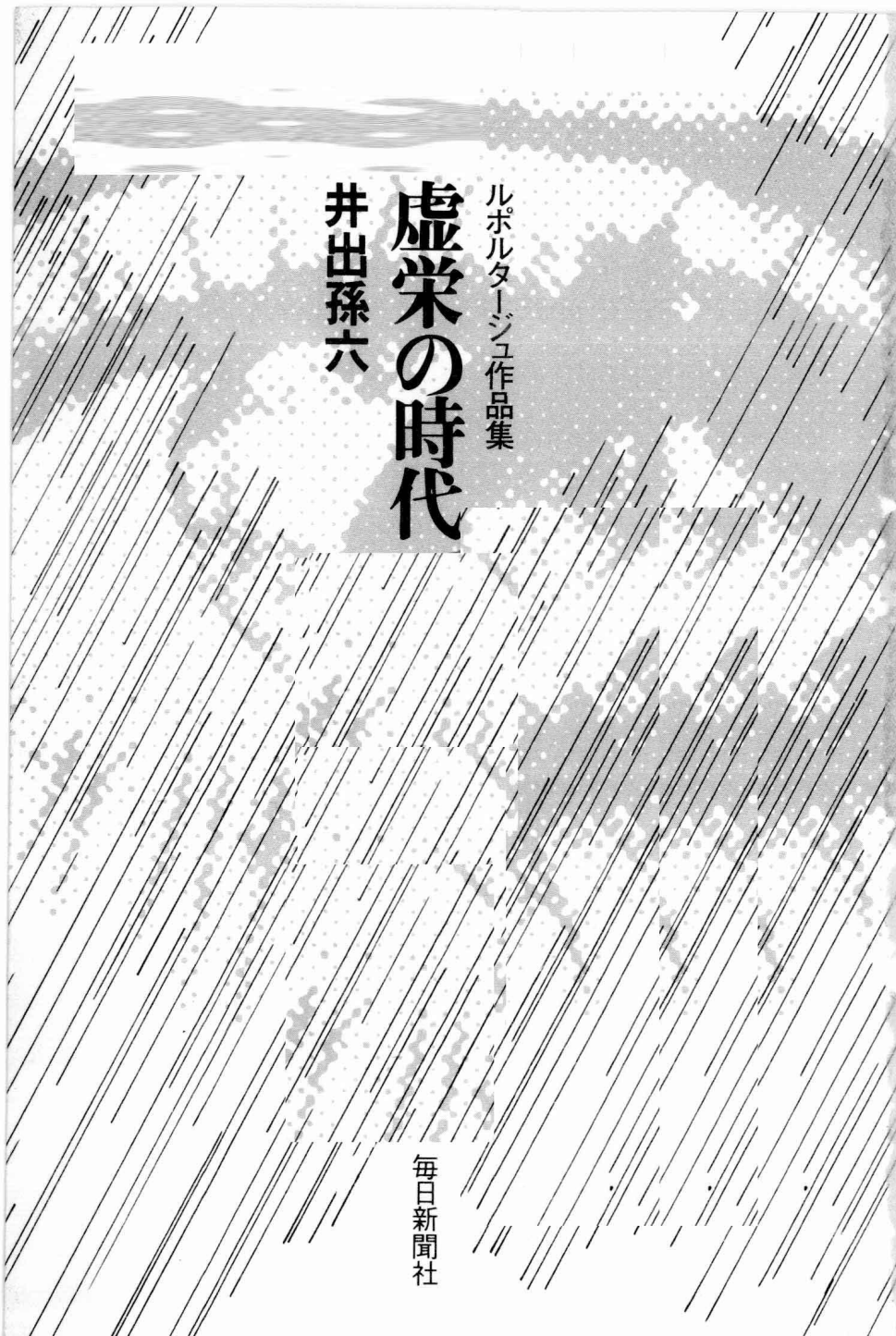


ルポルタージュ作品集

虚栄の時代

井出孫六

毎日新聞社



ルポルタージュ作品集

虚栄の時代

井出孫六

毎日新聞社

虚栄の時代

一九七八年三月一〇日 印刷
一九七八年三月二〇日 発行

著者 井出孫六

編集人 吉田掟二

発行人 高原富保

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八〇三 北九州市小倉北区榑屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

ルポルタージュ作品集

虚栄の時代・目次

第一章 蝕まれた世界 5

大雪山の白ろう病 7

奪われた海——東京湾 27

機織唄の退場 64

第二章 苦悩する沖縄 85

復帰不安におののく島 87

海洋博の光と翳 109

第三章 棄民の街 141

筑豊・ボタ山のあとに 143

木枯し吹く横浜・寿町 163

頑張れ！ 藤野さん 177

第四章 '68年のひとつの記録 197

日大KK破産のとき 199

あとがき

各章解説・鎌田 慧

装幀 竹内宏一

第一章

蝕まれた世界

大雪山の白ろう病

一

山国に生まれ育った私には、いくつかの山についての風物詩がある。山並のはるか彼方、紺青の空に溶けこんでいくようにゆっくりとたちのぼっていた一条の煙りは、人がそこでまっ黒になつて炭を焼いている証しだった。それが消えていったのは、すでに大分前のことだ。最近故郷に足をむけた私は、いま木炭はプロパンガスを燃料として製造されていることを知らされた。プロパンガスで焼かれた木炭は、高級料亭の需め^{もと}に應じて、おどろくような高値で東京に出荷されているというではないか。私のもつ山の風物詩のひとつが、またしても博物館行きとなつてしまったのだ。

私の故郷の山間の村々から、たちのぼる竈^{かまど}の煙りが一斉に消えたのは、昭和三五、六年のこと、仁徳天皇が眉をひそめるには及ばなかった。LPGの炊飯器の普及が、またたくまに薪炭を駆逐してしまった結果だ。そのことによって、たしかに村々の台所は格段に衛生的になり、主婦の家

事労働はどれほど省力化されたかわからない。

だが一方で、それまで住民の燃料源であった村の共有林が荒れるにまかされるという結果も生じた。若者は工場へと流出し、残された老人たちには共有林の手入れは大きな負担であったから、薪の不要になった共有林は、明らかに「お荷物」となってしまった。そこに降って沸いたように、開発という名の別荘ブームがやってきたというのだ。長いことお荷物になっていた共有林は、常会の決議をまつまでもなく、中央からやってきた不動産会社に買いとられることとなる。やがて間もなく、荒れるにまかされていた共有林にブルドーザーが入り、山肌は容赦なく削りとられてアスファルトが流しこまれ、ゴルフ場のグリーンが現出するのもそう遠くないと語られていた。

だが、樹木の茂った山林の水源滋養能力を百としたとき、ゴルフ場の芝は一五パーセントにも充たぬというデータひとつとってみても、共有林の秘めていた測りしれぬ恩恵が、村人の前から喪われてしまったことがわかる。そればかりではない、不動産業者の競合から、村ぐるみ汚職の渦にまきこまれていったという悲喜劇もひとつならず耳にした。共有林の荒廃は人心の荒廃をもよんだのだ。風と桶屋ふうに因果をたどれば、諸悪の根源は、プロパン炊飯器の普及にあったということになる。

竈からたちのぼる煙りが消えたちょうど同じ頃、故郷に帰った私は山の彼方に模型飛行機をとばす、あの虹の羽音のような重い金属音を耳にしたことがある。目をこらしても、山の彼方に模型飛行機のカゲはなく、音だけが断続的に伝わってくるのを気にしていた私に、「あれは自動鋸の音だんべ」と、村の人はこともなげに耳なれぬ横文字を口にした。

かつて杣人の振う斧は、カーンカーンと乾いた空気を震わせて山にこだましていたものだが、

私の耳にした自動鋸オートルソーの重い金属音は、山肌にそぐわぬ不協和音として感じられた。木魂こだまとは、文字通り木たの魂たましいのことにちがひなく、杣人の振る斧の音は、自然と人間の営みとの調和を現わす協和音としてあった。だが、チェーン・ソーの金属音は決して木魂をよぶ自然のなかの音でないことが、私には氣にかかった。果たして、里の人びとが氣づかぬうちに、「白ろう病」という奇病がひそかに広まっていたのである。

二

この冬、雪深い北海道の大雪山系に私が足を向けてみようと思ひたつたのは、職業病に認定されてすでに一〇年近い白ろう病が絶滅されたどころか、依然殖えつづけているらしいということに耳にしたからであつた。豪雪のなかでの冬山造材がどのようなものなのか、私には想像のしようもなかったが、白ろう病が殖えているということは、林業労働者のおかれてゐる条件が決して改善されていないことのバロメーターのように思へたからでもあつた。

札幌を発つときには薄陽さえ洩れていたというのに、汽車が旭川に向けて北に走るに従ひ、天候は激変して、車窓が急にスリガラスになつてしまつたような吹雪が石狩平野にふきまわつてきた。引込み線にそつて赤レンガの倉庫の棟を從えた大きな駅舎が吹雪のヴェールにおおわれてたずむ風景は、どことなしかつて通つたことのあるシベリア鉄道沿線のトムスク辺を私に思ひ起こさせていた。異国に來たような錯覚が一瞬頭をかけぬける。

札幌から旭川まではわずか二時間足らずだというのに、頬にふれる旭川の冷気は極北のそれをおぼしめるものだった。改札口には、紺のアノラックに身を固めた全林野労働組合旭川地本の佐藤義郎さんと須藤保さんが腕に赤い腕章をまいて出迎えてくれた。山の四日間先の導者となってくれという。旭川名物のラーメンで腹ごしらえをすませた私たちは、須藤さんの巧みなハンドルさばきで、吹雪の中の石狩川をさかのぼって大雪山をめざすこととなった。すでに佐藤さんは四日間の日程表をコピーにして用意してくれていた。

1月16日午後 大雪営林署訪問

1月17日 留^べ込^め志^し内^{うち}製品事業所他一カ所を訪ね、作業見学ののち現場で振動病訴え者と懇談

1月18日 上川営林署訪問、上川町で民間業者と懇談、民間作業現場を訪ねて、夜上川町の振動病認定者と懇談

1月19日 愛別製品事業所訪問、同所で振動病認定者と懇談、旭川営林署訪問

主要項目をあげると、以上のようなスケジュール、全行程は約四〇〇キロという。日程表には、佐藤、須藤両氏のほか、行く先々で各分会役員数名が案内してくれることになっている。これではまるで「大名旅行」というものだ、私は内心大いに恐縮した。あとで知ったのだが、分会役員の方々はみな非専従だったから、私たちのために年次休暇をさいてくれたというのだ。

「労働医学という専門柄、いろんな労組の人たちと接する機会がありますが、山の人たちといふのは、接していて気持ちいいですね。みんな素朴な人たちなんですよ」

札幌で会ってきた北大医学部の渡部助教授の言葉が思いだされる。「酒と賭博と喧嘩」そんなイメージが山の「飯場」につきまとうとしたら、それは過去の神話にたぶらかされてのことにち

がない。旭川地本の各分会には、独自の職場ニュースが日刊ですでに二千号に達しているところも珍しくないという。そのような努力の積重ねが、山の気風までも変えてきた面を見落としてはならないのだろう。

吹雪の原野をひた走る車の中で、紅顔の面影をたたえた佐藤教宣部長の語る林業労働者たちのおかれている現状についての説明は、私には耳新しいことばかりであった。——同じ営林署に勤務しながら「定員内」公務員と「定員外」公務員という奇妙な呼び方があること、事務職員のはほとんどは定員内で、生産現場の労働者はほとんどすべて定員外であること。その定員外公務員の中にも「常用」と「定期」と「臨時」とがあること。「常用」と呼ばれる人々はいわゆる通年雇傭で年間を通じて山で働くが「定期」というのはむろん国電の乗車券などのことではなく、一定期間山で働き、山仕事がなくなると失業保険で細々と生活しなければならぬ人々のことだという。

このような雇傭の複線状態に見合うように、賃金形態も複雑をきわめている。「定員内」の給与は月給制で週の労働時間は四四時間にきめられているが、「定員外」作業員の給与は日給制の四八時間労働なのだ。日給制には定昇がこめられていないから、春闘でたたかう以外に昇給はありえない。そこに全林野の下部の強さがあるともいえる。

だが、賃金面でさらに複雑なのは、現場作業員の多くが、この単純日給制でなく、出来高払いの日給制になっていることだ。低くおさえられている日給を出来高の歩合いによってカバーするわけだが、国有林の場合、出来高の基準は伐採計画がたてられた段階で当局と組合と当事者の三者協議で決められることになっている。つまり、その都度団交が行なわれると考えればよい。

だが、ここにひとつの陥穽がある。チェーン・ソーという恐るべき能力を有する機械の存在な

のだ。身近かな例でいえば、いま小学生が使っている電気鉛筆削りを思い起こしていただければよい。勞せずして鉛筆は何本でも削ることができる。その代わり、子どもたちはあの楽しかるべき小刀の使い方を知らずに育っている。チェーン・ソーの能力は、あの鉛筆削りに似ている。動かさえずれば、木は自動的に際限もなく伐れる。出来高という蜜を示された時、いったいどうチェーン・ソーを止められようか。出来高賃金制は、いわば手斧・鋸時代の山の慣行であったというべきだろう。その古典的な賃金制度とチェーン・ソーという現代文明の生んだ機械が無媒介に結びあわされたところに、白ろう病という現代の奇病は発生したのではあるまいか。組合は、昭和四四年傘下全域で全組織をあげてストライキを構えながら、チェーン・ソーの一日二時間規制を当局に認めさせたのだった。

杉、から松の成熟年限が三〇年、えぞ松、とど松のそれは六〇年といわれる。たぶん、斧や鋸という生産手段は、自然のそのようなテンポに調和したものだ。にちがいに、生産手段としてのチェーン・ソーは、杉、から松が一年で、えぞ、とど松が二年で成熟するような異変でも来なければ、この狭小な国土にはふさわしくない。

車が石狩の源流を遡って大雪山系の懷ろ深く進むにつれ、私の素人目にも山の濫伐の模様はわかった。山の経営は文字通り百年の単位で考えなければならぬはずなのに、ここ数十年その射程を無視してチェーン・ソーの威力が発揮された結果ではないか。しかも皆伐のあとの造林が丹念に行なわれている形跡はない。技術的にも、標高千メートル以上の植林には根付きはよくても成育のむつかしい条件があるという。天然更新を待つとしたら、たしかに数十年の時間が、そこに必要なのだ。

最初に「病ろう白」が現われたのは、長野県の本曾谷の林業労働者のなかにおいてだったといわれる。チェーン・ソーの音が山に鳴り響くようになって三、四年たった昭和三六年、この奇病を訴えた人たちのほとんどが、いわゆるチェーン・ソー・マンといわれる伐木造材手であったことから、現場労働者たちは経験的に病源がチェーン・ソーであることに気づき、長野庁当局に職業病認定を働きかけたのだという。だが「たしかに指は冷たく、感覚は鈍くなっているが、これは気候の影響、本人の栄養、体質に関係しており、作業による影響は、職業病と認められる程度のものではない」という管理医の診断書が防波堤となって「病ろう白」の実態は白日にさらされることになった。むろん、当局は認定を拒んだ。

本曾谷で病ろうの訴えが出て数年後、正確には昭和四〇年三月のある日、NHKの『現代の映像』は、「病ろうの指」という不吉な題名のカメラルボをブラウン管にのせて全国に流した。私は今度、あらためてその録画を観る機会を与えられたのだが、画面にはいきなり前後左右から何本かの腕が突きだされるところから、「病ろうの指」は始まった。皺だらけの節くれだった手は、青森や岩手や本曾の山中の杣人たちのそれだったが、指の動きは鈍く、掌はいちように生気を失って、病ろうのように冷たく白くなっていた。「死者の手を握った人はご存知だろう。氷のように冷たくなった手」というナレーターの説明にオーバーラップして杣人たちの訥々とした訴えが

流れる。すでにカナダなどで、white finger とか dead finger という呼び名があったというが、誰言うもなく呼ばれた「白ろうの指」にも、働くものの底知れぬ不安がこめられていたといえよう。仙人たちの訴えをカルテにまとめると、その症状は次のような四段階にわかれる。

〈第一期〉 時々痛んだり、手の感覚がおかしくなるが、一時的な現象である。指の皮膚の毛細血管が縮んでくる。

〈第二期〉 痛みや感覚の異常が消えないで続く。指や手が冷たかったり、ひえ易くなる。手が紫色がかかることもある。汗っぽくなる。手がふるえたり、手や指の動きがおかしくなる。

〈第三期〉 白ろう発作（レイノー現象）が起こる。第二期の症状がますます悪化する。筋肉にも障害が現われてくる。力が弱くなり、筋肉がやせてくる。大脳にも影響が及んで、神経衰弱のような状態にまでなる。ホルモンの働きにも異常が起こる。

〈第四期〉 白ろう発作が頻繁に起こり、白くなる部分も広がり、足にも白ろうが起こるようになる。心臓や脳の血管にも異常が起こり、狭心症のような胸の痛みが起こったり、頭痛やめまい、はき気の発作（メニエル症候群）を起こすようになるものもある。脊髄にも障害が起こるらしい。この時期には症状は固まってしまつて、ほとんどよくならない。労働能力も低下し、ほとんど働けないような体になってしまう。

思えば、昭和三十年代のわが国には、それまで耳にしたことのない奇病が数多く姿を現わしている。水俣病がそうであったし、森永ミルク中毒症がそうであったし、サリドマイド奇型がそうであったし、スモン病の発生もまさしく同じ頃であった。水俣病を誘発した有機水銀の背景には、化学肥料の大量生産があり、森永ミルク中毒症の背後には、乳業界の競合があり、サリドマイド